

## 親切に国境はない

滋賀県 三股崎 修

昭和十三年九月十日応召、歩兵第十九連隊第二機関銃隊に入隊、一期の検閲、秋期演習に参加、帰宮、ただちに中支派遣人見部隊要員として神戸港を出帆し、吳淞、南京、武昌、岳州をへて洞庭湖畔の任地につく。第三大隊重機要員として大雪山付近の戦闘に参加し、七月師団凱旋、召集解除される。

昭和十八年十月二十八日動員下命、中部三十六部隊に応召、第三機関銃隊要員として十月二十八日、大阪港出帆。九州若松にて十三隻で船団を編成、石炭を一千屯をつみ、高雄、サイゴンへてタイ国バンコック港に上陸したが、早速空襲を受けた。晩は馬小屋で寝る。馬糞くさいが足をのばして寝られることはうれしかった。御用船のなかのきゅうくつなことは皆さんも経験のとおりです。昭和十九年一月一日、軍命により三個大隊を五個

大隊に編成、独立混成二十九旅団第一六二大隊銃砲隊となる。私はバンコックのルンピニー公園内の立派な兵舎のなかで陣中生活でした。

毎金曜日に中隊の半数以上が各種の勤務につく。軍、旅団、各司令部衛兵、パンギョウ被服所、パクナム監視所、三井第一・第二、三菱第一・第二の四造船所、内務衛兵、廐廻番、当番、内務廻番等々、廻番上等兵の勤務者整列、各衛兵司令が隊長殿、廻番士官殿に敬礼し七日間勤務することを申告し、各任地に電車、トラック等で出発する。私もパクナム監視所に兵三人とともに司令としていく。

電車にて七里半ほどはなれたメナム河々口にバラックがあり、河幅は一千メートルくらいで濁水がどんよりと流れております。二日目に日の丸の旗をたてた船が河口に停船しました。なつかしい日の丸、涙ができました。早速、船を訪問し船長に面会、九州の人で上陸してパクナムのまちでご馳走になりました。

この生活は自炊で毎日パクナムのまちへ買い物に出かけ肉や野菜を買って来て炊事です。河のかたわらにい

ながら、水はこの附近の民家から一升百三十円で買います。勿論雨水ですからボーフラがわいておりますので、非衛生的ですがいたしかたありません。水を使う時はつぼのきわをたたいてボーフラの沈んでいるうちにくみま

す。  
一人二時間ずつ立哨し、飛行機から河のなかへ投下した爆雷の落下する地点をみて、南右部隊掃海隊に電話で通報する任務です。

四日目にタイ人がわいわい騒いで衛兵所へやってきました。「何だ」とたずねたら、「日本ブジンリンコン、メチイナ」というのです。しばらくすると四、五人の現地人が日本の看護婦さん二人を連れて来ました。二人は興奮していました。ぬれねずみです。きけば船頭さん持金全部を渡してむこう岸へ渡せというから船で河のなかほどまでいったら、二人がひもでからだをくくり同性心中したのだそうです。

そのひもが水のなかでできて一人、一人すくいあげられたとのことでした。さっそく、衛兵所の非常用の兵隊の被服と着替えさせ、南方十六陸軍病院の外科に電話を

いれて引きとりを依頼いたしました。病院から軍医さんと婦長さんが引きとりにきてくださいました。事情を聞いてみると外科の看護婦さんのうちわもめから死をもとめたようです。婦長さんが被服をもって来て下さったので着換えて帰っていただきました。

昭和二十年六月二十四日、旅団司令部に勤務することになり、毎日陣地づくりの勤務につとめておりました。八月九日旅団移動のため列車の警乗兵として貨車に乗り、八月十六日晚十時に目的地のキリカーン駅に降車いたしましたところ、停戦とのことでその晩は倉庫のすみで防蚊網をかぶって寝ました。翌朝、下余呉出身の中村六蔵伍長が旅団通信隊にはいった情報として敗戦のニュースを知らせてくれました。ともかく自重しようとかたく約束をして、八月二十四日に汽車の屋根やモーターカーに乗せてもらってもとの勤務地チームアンに帰ってきました。

翌日、英軍将校が来て、このチームアンへ泰緬鉄道の労務者、婦人、子供、二万八千人を収容し健康回復まで衛兵の勤務せよとの命令でした。三日目に第一回受け入

れのため鉄道沿線まで七百メートルの所で貨車が止まり、私はこの道案内人として兵三人と出迎えに行きました。

長い間、労務に従事した人々は、よごれたはずたの衣服というよりはポロを身につけたていどのものです。土手のうえからみておりますと庭が動くので、なにかとたずねたらマラリヤとの答えでしたので、さいわいポケットに黄色マラリアの薬を三個持っていたのでやってくれと渡し、皆を連れて宿舎へ帰りました。

宿舎といっても全部竹で七メートルに百メートルの長さで、屋根はニッパヤシの葉でふいてあります。七日ほどして炊事場の附近を動哨しておりましたら、「カナリーマスター（眼鏡をかけた兵隊さん）」と呼びとめられ、飯ごうと新しいバケツを二つ持ってこいといって、砂糖とドラム缶七本にコーヒーをわかして、その味のよいところをバケツに二杯くれ、戦友と一緒に飲めといってくれました。

その後も腹がへったら炊事へ来いといっているところ馳走になりました。マラリアの薬をあげたのが炊事の班

長さんだったのです。人種がことなっているも親切にすべきであると感じました。

ときに連合軍の支給食事は一日二百四十グラムの飯と冬瓜の塩汁です。

太平洋戦争にやぶれて軍人はすべての希望をうしなしました。ことに泰緬鉄道工事に捕虜を使用した軍人、憲兵は、B級戦犯の件がこくなって、続々シンガポールへ連行され、部隊に残ったものも戦々かつきょうきょうのようでした。裁判の結果は殊勲があだとなり刑場のつゆと消えていかれました。

やしの木陰に南十字星をおおいで、故国をしのびつつ捕虜生活も年を越え、二十一年五月下旬に戦犯首実検のため駅の改札口のようなところともうけられ、四人の検札官（連合軍）、また下士官によってめぼしい時計、万年筆は没収され被服まで手を突っこんでしらべられ、「ネクスト カモン」でようやくパスポートの印をおしてもらえました。

パスポートを提示して上陸用船艇で本船へ、タラップを使って乗船し、一路祖国へと船足はやく、六月九日浦

賀の久里浜に上陸し、頭からDDTで消毒してもらい、すべての手続きが終わり、金二百八十円をいただき十一日午後十時になつかしの我が家に帰りました。

## サイゴンでの苦汁

滋賀県 澤 正 一

当然のように「澤正一さん来ましたよ、おめでとう」とまっかな一枚の紙を渡されました。いよいよ来たか、第二乙種第一補充兵編入。当時、我々が小学校のときから教育を受けてきたのは尽忠報国精神で、この戦争が神聖なもののように叩き込まれていました。

昭和十八年七月一日、舞鶴海兵団へ入隊すべし。当時まだ二十二歳の若さでしたのでみぶるいしながら張り切って入隊しました。

三百人ほどの召集兵は、上海海軍陸戦隊（二百人）と舟山列島（百人）に分けて配属になり、私は上海の陸戦隊に入隊、ただちに現地陸戦新兵教育（三か月）を受け

たのち、十一月一日づけで一等兵となり、關北部隊橋爪隊指揮小隊に配属を命ぜられ、管轄地の警備につくこととなりました。

上海事変及び大東亜戦争の歴戦の上官及び古兵のつわものばかりで、我々新兵は日々この人たちの顔色ばかりみて勤務していました。

十九年になると戦況はしだいかわってまいり、陸戦隊からもたびたび移動があったようでしたが、我々若い兵隊にはこまかいことはわかりませんでした。

そのころ、小隊長の従兵をしておりましたが、部隊の編成がえがあり、小隊長も他へ配属となって行かれることになりました。ときを同じうして私にも「澤、船に乗ってみないか」との言葉がありました。海軍軍人として海上勤務もやってみたいと思ひ、すぐ返事をしました。十九年七月、海軍の徴用船芝還丸輸送船の警戒要員として乗船し、大陸沿岸航路、軍隊及び物資輸送に従事しました。今も忘れません十九年十月、勤務中中国青島にて、台湾沖敵機動部隊と交戦し、大戦果をあげたとの報を聞き、ばんざいをあげたものでした。